

## 45 地蔵寺過去帳による華岡青洲の

### 系譜の新知見

松 木 明 知

#### 一、はじめに

わが国の医学史に名を留める医人の中で、華岡青洲ほどその系譜の詳細が考究されている例は少ない。呉秀三は大正十二年（一九二三）に上梓した「華岡青洲と其外科」の中で、青洲の同胞およびその四世の裔に及ぶ系図を示した。その後、約四十年程経ってから森慶三らは、昭和三十九年（一九六四）に刊行した「医聖華岡青洲」の中で、その後研究で明らかにされた事項を追加した系図を発表している。

以来三十年経っているが、研究し尽くされた感があり、昭和四十七年（一九七二）に那賀町が発行した青洲についての著書においても新知見は何も追加されていない。

今回演者は、那賀町の地蔵寺の過去帳を精査して、従

来不詳であり、青洲の研究にとって最も重要と思われる青洲の同胞および一世の祖、一世の裔の三代について新知見を得たので報告する。なお本研究は青洲の直系の御子孫である札幌市八代随賢の華岡青洲博士の御了解を得たものである。

#### 二、地蔵寺の過去帳について

那賀町西野山の地蔵寺は現在無住となっているが、その過去帳は、同町馬宿の西光寺の森大耕師が管理している。「地蔵寺過去帳名手荘」と題した過去帳は二冊あり、巻一は大体慶安年代から享和年代まで、巻二は寛政年代から明治初年までの法名を収めている。華岡家は巻二に披見される。

この過去帳の存在については関係者の間に知られてはいたものの、だれも本格的に調査していなかった。というのは、これを一見すれば、従来不詳であった諸点が直ちに氷解するからである。

さて巻二には直系、傍系の華岡家の人々の法名が披見されるが、最も大切な華岡青洲の部は「華岡家医師」となっており一目瞭然である。さらに法名の右肩に「随

〔文〕と『休』の記号が付されている。『随』は青洲の家系「随賢」の『随』であり、青洲の家系の区別を示したものであり、『休』は初代随賢の兄久左衛門の家系の『久』を『休』と示したものであり、両者は判然としている。

### 三、二代随賢の同胞について

過去帳に於トクと於トメの二名が披見される。没年令から逆算すると於トメは享和十年生まれ。於トクは享和十二年生まれとなる。二代随賢が享保七年（一七二二）生まれであること、華岡直系であり、老齢まで華岡家にした女性であること、そして生青をも考慮すれば、右の二人はいずれも青洲の父二代随賢の妹ではないかと推定される。

### 四、三代随賢青洲の同胞について

過去帳によつて文化二年（一八〇五）に没した青洲の妹「小陸」を、「小ムツ」と記しているから「コムツ」と読むことが判明した。「小陸」だけでは「コリク」とも読めるからである。

青洲の兄弟は長子の青洲以外に男三人、女四人がいる。三女のたねと四女については伝不詳であった。俗名「於

種」は天保四年に没し法名は「清山自円信女」で、三女のオタネに間違はなく、四女は文化十三年に没したキサと考えられる。

### 五、三代随賢の子供について

三代随賢には三男、四女の子供がいる。三男の友三郎は文化八年（一八一二）に没したとあるが、法名は知られていない。恐らく文化九年に没した「照善童子」過去帳にある文化九年（一八一二）に没した三女は、黒江川端六右衛門の妻となつたが、知られていなかった。過去帳には俗名「於榮」とあり、天保五年五月二十七日に没したとある。

### 六、おわりに

地藏寺の過去帳によつて、従来詳細が知られていなかった二代から四代随賢の三世にわたる同胞の中六名について俗名、法名、没年月日をほぼ確定することが出来た。

（弘前大学医学部麻酔科）